

多様な社会層である市民の歴史学習は、現在、多様な形態と内容をもって広がりを見せている。その現状の一端を視野に、私のささやかな体験からの提言を含めて、今日的課題を問ひかけた。

市民の学習契機は、余暇の一部を過去へのロマンや郷愁に託す層から、地域活動や諸運動参加による触発など全く多様である。だが過去を学ぶことにより、より確かな視野、深い感動への契機を求めている点では、ほぼ一致しているといつてよい。

また日常的には映像文化や啓蒙書など情報源とした歴史文化の受容層である市民は、住民として地域の伝統的行事や文化事業への参加者、担い手でもある。

一般的に、市民の歴史意識の底辺には、旧来からの郷土史の視角、成果、評価の影響を多分に含むのも事実であり、研究分野との関係が問題視される。

戦前の郷土史では、国家的秩序下の地域統合への柱としての郷土像創出と郷土愛への精神的土壌形成の役割が前提とされ、科学的研究とは無縁な存在であった。そこでの住民の歴史学習は、専門的研究に対し、史料提供と成果の受容において奉仕的役割を担いつづけた。

特に、天皇制国家による科学的史観や自由主義的言論への徹底的抑圧は、永年にわたり研究分野と国民の関係を絶ち切り、国民の近代的・科学的視角による歴史観の形成を阻止しつづけて、その後の市民意識形成に影を落している。

このような過去は、戦後の歴史学において郷土史と研究分野の二重性としてうけつがれ両者の関係は、その後の地方史研究、歴史教育活動の展開によっても、必ずしも充分な接点をつくりだせないまま推移してきた。

この状況に変化がおきるのは、高度経済成長後における社会変化への対応が、地方と市民の課題とされ「草の根」に表現される底辺

からの行動期においてである。

八〇年代にかけ、自然環境や文化財の保護運動、公害や住民の自治と権利の諸問題、さらに地方での政治革新が市民の幅広い運動となって展開された。市民の歴史学習も、行政の「講座」参加、自主学习組織結成など、従来の「郷土史」主体の枠をこえ拡大された。

この間、「地域」「民衆」が、学習対象とされ、研究者、教師、学生、市民の共同学習による「地域掘りおこし」活動が、埋もれたままの民衆伝統に光をあてる成果を生み出した。

市民にとって、激変した社会を見すえ、地域コミュニティの形成と過去の歴史主体への認識が、遺産の継承と選択のなかで迫られたときであり、研究分野との接点が、つよく求められた時であった。

私が深くかかわった教師と市民共同の二つの自主グループの活動も、古文書や史跡の学習をとおして、民衆と地域を確かめ、過去と無縁でない現代を見すえたとともに位置づけられ（八一年春。「神奈川の社会教育二号」参照）るが、その流れは、自由民権百年全国集会への「掘りおこし」と参加にかかわり、その市民体験は、現在も学習の場に息づいている。

また、自治体による編纂事業（川崎市では「議会史」「労働史」「市史再刊」や情報公開制度の整備により、市民の学習基本条件である史料の公開がすすみ、根本史料との接触による歴史像構築の機会も増大している。

この状況と蓄積を目にするとき、市民の学習は歴史研究との交流による科学的視野の拡大を、また研究・教育分野では市民、特に高令者層の近代化体験、学習の投影による研究内容の充実が、ともに成果づけられ、地域と国民に還流される。

多様な起点からの市民の歴史学習が、研究分野とともに、その歩みを一層すすめるとき主権者にふさわしい歴史意識を内容とした国民共有財産としての歴史学が、より豊かさをもち成長することは確かであろう。